



図6. 冬緑性アオウキクサ属植物の産地の様子. A. 豊中町岡本 (「コウキクサ」)、B. 高瀬町比地中 (「コウキクサ」)、C. 普通寺市吉原町 (「ムラサキコウキクサ」)、D. 普通寺市下吉田町 (ナンゴクアオウキクサ)

○石井 猛編著『ホテイアオイは地球を救う』(内田老鶴圃, 1992年5月, 116頁, 2060円)

すごい表題の本だが、地球環境問題が深刻化する中で、編著者が、いかにホテイアオイに期待をかけ、情熱をもってその研究に取り組んできたかを示すものだろう。本書にホテイアオイで地球を救うための処方箋が載っているわけではない。

前半は、ホテイアオイに関する話題を新聞記事や著者の経験談を通じて親しみやすく紹介している。ホテイアオイは明治17(1884)年に日本に入ったというのが通説であるが、江戸時代から日本でホテイアオイが栽培されていたという新事実を、ホテイアオイの描かれた浮世絵(1855年?)の存在から示している。「5. ホテイアオイの有効利用への研究」の章では、著者らの研究成果の一

端が紹介されている。

後半の半分は「付録」で、まずホテイアオイを利用した製品が紹介される。焼酎、パン、まんじゅう、タバコ、香水、他。最後の「ホテイアオイ中の有効成分の研究」は一般の方には興味がない部分だろうが、本書のなかではいちばん内容のある部分かも知れない。

ホテイアオイに関するはじめての単行本ということで、期待して目を通したのだが、内容的には軽く、もの足りないものであった。その理由を考えてみたのだが、結局、著者ら自身の研究成果しか紹介されていないからではないかと思う。日本でもホテイアオイに関するレベルの高い研究の蓄積があるのだから、その成果を集約したモノグラフを期待したい。

(角野康郎)